

最も短い詩としての俳句の性格（III）

山口 青邨

それは三行詩である、然しこの運動も第二次大戦前にすでに衰へてゐた、日本とフランスでは土が違つてゐる、移植ではちょっと根がつかなかつた。

フランスには、それとは別に短い詩がないではなかつた。ルナールなどには俳句に似たものさへある。

な が す ぎ る —— 蛇

弾機仕掛けの煙草の粉 —— 蚊

二つ折の戀文が花の番地をきがしてゐる —— 蝶

わしや子供が生れたやうだ —— 馬鈴薯

ルナールの「庭の中」から拾つた詩である。

蛇、蚤、蝶、馬鈴薯といふ季題もちゃんと入つてゐる、短いだけにやはり氣の利いた物の觀方をし奇智に富んだ表現をしてゐる。

かういふものはあるけれど、日本の俳句ほど澤山の人によつて、もうりもり作られてゐる詩は世界中にはない、五・七・五の調べ、十七字、季題を含む——といふやうな整然たる詩は外にはない。それこそ玉のやうな詩だ——と言へるであらう。